

隨筆難

寺田寅彦

青空文庫

随筆は思ったことを書きさえすればよいのであるから、その思ったことがどれほど他愛のないことであつても、またその考えがどんなに間違つた考えであつても、ただ本当にそう思ったことをその通り忠実に書いてありさえすればその随筆の随筆としての真実性には欠陥はないはずである。それで、間違つたことが書いてあれば、読者はそれによつてその筆者がそういう間違つたことを考えているという、つまらない事実ではあるがとにかく、一つの事実を認識すればそれで済むのである。国定教科書の内容に間違いのある場合とはよほどわけがちがうのではないかと思われる。尤も、いわゆる随筆にも色々あつて、中には教壇から見下ろして読者を教訓するような態度で書かれたものもあり、お茶をのみながら友達に話をするような体裁のものもあり、あるいはまた独り言ないし寢言のようなものもあるであろうが、たとえばどういう形式をとつたものであらうとも、読者としては例えば自分が医者になつて一人の患者の容態を聞きながらその人の診察をしているような気持で読めば一番間違いないのではないかと思われる。随筆など書いて人に読んでもらおうというのはどの道何かしら「訴えたい」ところのある場合が多いであらうと思われる。

少なくとも、自分の場合には、いつもただその時に思ったことをその通りに書いてゆくだ

けであるから、色々間違つたことを書いたり、また前に書いたことと自家撞着するように見えることを平気で書いたりしている場合がずいぶん多いことであろうと思われる。読者のうちにはそういうことに気がついていてる人は多いであろうが、わざわざ著者に手紙をよこしたりあるいは人伝ひとづてに注意をしてくれる人は存外きわめて稀である。

つい先達せんだつて「齒」のことを書いた中に「硬口蓋こうこうがい」のことを思い違えて「軟口蓋」としてあつたのを手紙で注意してくれた人があつたが、こういうのは最も有難い読者である。ずっと前の話であるが、『藪柑子集やぶこうじしゅう』中の「嵐」という小品の中に、港内に碇泊ていはくしている船の帆柱に青い火が灯ともつていてるという意味のことを書いてあるのに対して、船舶の燈火に関する取締規則を詳しく調べた結果、本文のごとき場合は有り得ないという結論に達したから訂正したらいいだろうと云つてよこした人があつた。しかしそれは訂正しないでそのままにしておいた。この小品は気分本位の夢幻的なものであつて、必ずしも現行の法令に準拠しなければならない種類のものでもないし、少なくとも自分の主観の写生帳にはちゃんと青い燈火が檣頭しょうとうにかかったように描かれているから仕方がないと思つたのである。

去年の暮には、東京の某病院の医員だという読者から次のような抗議が来た。

「（前略）然る処しかところ続冬彦集六八頁第二行に、『速度の速い云々（速度の大きいに非ず）』と有これあ之これは素人なら知らぬ事物理学者として云ふべからざる過誤と存じ候、次の版に於ては必ず御訂正あり度たし 失礼を顧みず申上ぐる次第に御座候 敬具」

なるほど、物理学では速度の大小というのが正当で、遅速をいうならば運動の遅速とでもいわなければ穏当でないかと思われる。それでもしこれが物理学の教科書か学術論文の中の文句であるとすれば当然改むべきはずであるが、随筆中の用語となると必ずしも間違いとは云われないかもしれない。紺屋の白袴、医者の不養生ということもあるが、物理学の学徒等が日常お互いに自由に話し合う場合の用語には存外合理的でないものが多数にあつて、問題の「速度のはやい」などもその一例である。この場合の「速度」は俗語の「はやさ」と同義であつて術語のヴェロシティーと同じではないのである。例えばまた「のろい週期」などという言葉も平気で使うが「長い週期」というよりも日常会話にはこの方が実感があるから自然にそんな用例が出来るのであらうと思われる。「のろい振動の長い週期」を略して「帝展」「震研」流に云つたものと思えば不思議はないのである。従つて、「速度のはやい」なども実感を強めるための俗語として「速度の大なるすなわち運動の速い」の略語として通用を許してもそれがために物理学は何の損害をも受ける心配はないかと思

われる。それで、負惜しみのようではあるが、物理学を専攻する人間でも、座談や隨筆の中ではいくらか自由な用語の選択を寛容してもらいたいと思うのである。

この抗議のはがきの差出人は某病院外科医員花輪盛としてあつた。この姓名は臨時にしらえたものらしい。

この三月にはまた次のような端書^{はがき}が来た。

「始めて貴下の隨筆『柿の種』を見初めまして今33頁の鳥や魚の眼の処へ来ました、何でもない事です。試みに御自分の両眼の間に新聞紙を拵げて前に突き出して左右の眼で外界を御覧になると御疑問が解決せられるのです。御試みありたし、（下略）」

魚や鳥のように人間の両眼の視界がそれぞれに身体の左右の側の前後に拵がついていたとしたら吾人の空間観^{くうかん}がどんなものになるかちよつと想像することが六ヶしいという意味のことを書いたのに対して、こういう実験をすすめられたのである。しかし人間の両眼が耳の近所についていない限り、いくらこういう実験を試みたところで自分の疑問は解けそうもない。

この端書をよこした人も医者だそうである。以上の外にもこれまで自分の書いたものについて色々の面白いことを知らせてくれた人には医師が一番多いようである。やはり職掌

柄で随筆を読むにも診察的な気持があるせいであろうが、とにかくこういう読者は自分な
 どの書くような随筆にとつては一番理想的な読者であろうと思われる。それだから自分も
 患者の気持になつてちよつとだだをこねてみた次第である。

上記のごとき自由な気持で読んでくれる読者とちがつて自分の一番恐縮するのは小中学
 の先生で、教科書に採録された拙文に関して詳細な説明を求められる方々である。

「常山くさぎの花はな」と題する小品の中にある「相撲取草」とは邦語の学名で何に当るかという質
 問を受けて困つてしまつて同郷の牧野富太郎博士の教えを乞うてはじめてそれが「メヒシ
 バ」だということを知つた。その後の同様な質問に対しては、さもさも昔から知つていた
 ような顔をして返答することが出来た。ところがある地方の小学校の先生で、この「相撲
 取草」が何であるかということを本文の内容から分析的に帰納きのう演えん繹えきして、それがどうし
 ても「メヒシバ」でなければならないという結論に達した、その推理の径路を一冊の論文
 に綴つて、それにこの植物の腊葉さくようまで添えたものを送つてよこされた人があつて、すつ
 かり恐縮してしまつたことがあつた。こうなると迂闊うかつに小品文や随筆など書くのはつつし
 まなければならぬという気がしたのであつた。

ある時はまたやはり「花物語」の一節にある幼児のことを、それが著者のどの子供であ

るかという質問をよこした先生があつた。その時はあまり立入った質問だと思つたのでつい失礼な返事を出してしまつた。理科の教科書ならばとにかく多少でも文学的な作品を児童に読ませるのに、それほど分析的に煩雑な註解を加えるのは却つて児童のために不利益ではないかと思うというようなことを書き送つたような気がする。これは後で悪かつたと思つた。

以上挙げたような諸例はいずれも著者にとつては有難い親切な読者からの反響であるが稀には有難くない手紙をくれる人もある、例えば、昨年であつたか、ある未知の人から来た手紙を読んでもみると、先ず最初に自分の経歴を述べ、永年新聞社の探訪係を勤めていたということを書いたあとで、小説家や戯曲家はみなどこから種を盗んで来てそれを元にして自分の原稿をこしらえるのだが、自分は知名の文士の誰々の種の出所をちゃんと知つてゐる、と云つたようなことを書きならべ、貴下の隨筆も必ず何か種の出所があるだろうというようなことを婉曲に諷した後に、急に方向を一転して自分の生活の刻下の窮状を描写し、つまりは若干の助力に預りたいという結論に到達しているのであつた。筆跡もなかなか立派だし文章も達者である。こんな手紙よりもその人の多年の探訪生活の記録をかかせたらきつと面白いであろうと思われた。それはとにかくこの人の云う通り、自分

なども五十年来書物から人間から自然からこそ盗み集めた種に少しばかり尾鰭おひれをつけて全部自分で発明したか、母の胎内から持つて生れて来たような顔をして書いているのは全くの事実なのである。

人から咎められなくても自分でも気が咎めるのは、一度どこかで書いたような事をもう一度別の随筆の中で書かなければ工合の悪いようなはめになった時である。尤もそれ自身では同じ事柄でも前後の關係がちがつて来ればその内容もまたちがつた意義をもつて来ることは可能であるが、そういう場合でも同じ読者が見ればきつと「またか」と思うに相違ない。

現に自分でも他人の書いたものを読んでいてそういう場合に逢うとやはりちよつとそんな気がするようである。しかし考えてみると、例えば子供の時分に同じお伽ときばなし噺を何遍でも聞かされたおかげで年取つて後までも覚えておられるが、桃太郎でも猿蟹合戦でも、たった一度聞いて面白いと思つたきりだったらおそらくとうの昔に綺麗に忘れてしまったに相違ない。してみると本当に読んでもらいたいと思うことはやはり何遍か同じことを繰返して色々の場所へ適当に織込むのが著者の立場からはむしろ当然かもしれない。前に読んだことのある読者はまたかと思うとしても一度読んだだけでは多分それつきり忘れてし

まったであろうことを、またかと思うことによつて始めて心に止めるようになるかもしれない。のみならず、著者の側では同じことを書いた第何回目かのを始めて読んでくれる人もやはりあるであろう。こう考えて来ると自分などは街頭に露店をはって買手のかかるのを待っている露店商人とどこかしらかなり似たところがあるようにも思われてくるのである。

同じようなことを繰返すのでも、中途半端の繰返しは鼻についてくるが、そこを通り越して徹底的に繰返していると、また一種別の面白味が出て来るようである。ジグスとマジの漫画のようなものもそうであり、お伽噺や忠臣蔵や水戸黄門の講談のようなものもその類である。云わば米の飯や煙草のようなものになつてしまうのかもしれない。そうなつてしまえば、もうジャーナリズム的批評の圏外に出てしまつて土に根を下ろしたことになるであろうが、今のジャーナリズムの世界ではそういうことはちよつと困難なように見える。

以上は自分が今日までに感じた随筆難のありのままの記録で、云わば甚だ他愛のない「筆禍事件」の報告と愚痴のいたずら書に過ぎないが、こんなことまで書くようになるのもやはり随筆難の一つであるかもしれないのである。（昭和十年六月『経済往来』）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第四卷」岩波書店

1997（平成9）年3月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 文学篇」岩波書店

1985（昭和60）年

初出：「経済往来」

1935（昭和10）年6月1日

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5886）を、大振りにつくっています。

※「常山《くさぎ》の花《はな》」の「の」は、底本編集時に「常山《くさぎ》〔の〕花《はな》」の形で補われたものです。

入力：砂場清隆

校正：青野弘美

ファイル作成：

2006年6月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

随筆難

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>